様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｋ１７０６３

研究課題名（和文）戦間期日本の「社会」と「政治」―中島重の政治思想を手がかりに

研究課題名（英文）The concept of "Political" and " Social" in interwar Japan: Nakajima Shigeru's political thoght reconsidered

研究代表者
織田　健志（Oda, Takeshi）

岩手大学・教育推進機構・准教授

研究者番号：００５７１７９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦間期日本の代表的な知識人の一人であり、政治的多元主義（political pluralism）の紹介者として著名な中島重の政治思想を考察した。具体的には、中島が力説した「共同社会」の観念の内実を検討したうえで、国家主権の実体化を批判して「社会」の規範的意味を重視した彼が、公共性や権力という「政治」の本来的な属性をどのように理解したのかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I considered Nakajima Shigeru's political thought. He is one of the leading intellectuals in the interwar period Japan, and known for the thinker who has introduced political pluralism to Japan. In this research, I examined the concept of "community" Nakajima emphasized, and his cognition about "the political",publicness and power in social and political space.

研究分野：日本政治思想史

キーワード：中島重　政治的多元主義　社会的基督教　社会　政治的なるもの

１．研究開始当初の背景

現代は、種々の社会運動や NPO 団体の興隆に象徴される、「社会」が高度に発達した時代である。こうした「社会」領域の拡大は、一面では、人々の相互行為である「政治」の営みにとって有利に作用し得る。しかし他方で、それは S.ウォーリンが「政治的なるもの」の「昇華」（sublimation）と呼んで危惧する事態をも引き起こす（『政治とヴィジョン』2007 年）。すなわち、元来「政治」の役割であった集団的な意思決定が、「社会」の諸部分に拡散することにより、公共的＝公開的（public）な秩序形成という「政治」の本質が形骸化してゆく危険性を孕んでいるのである。

近代日本において、このような意味で「社会」と「政治」の問題がはじめて思想課題となったのは、第一次世界大戦後であった。体制に批判的な知識人のあいだで、国家が公共的価値を独占することへの疑念が生じ、国家と区別された「社会」への関心が次第に高まってきたのである。その過程については、飯田泰三『批判精神の航跡』（1997 年）や有馬学『日本の近代（4）　「国際化」の中の帝国日本』（1999 年）等の優れた業績がすでに存在する。とりわけ、大正知識人の言説を対象とした「社会の発見」論は、その大きな成果といえよう。

申請者はこれまで、「社会の発見」を遂げた一人である長谷川如是閑を対象に、以上の問題の研究を深めてきた。博士論文「共同性の探求――長谷川如是閑の政治思想」（2009 年 3 月、同志社大学甲 400 号）では、如是閑における「社会」と「政治」の関係づけの仕方を考察した。具体的には、如是閑が人間の互助性に基づく「社会」秩序と権力関係を基盤とした「政治」秩序とを対置し、前者を擁護する立場から後者を徹底的に批判したこと、そして「社会」秩序の正統性を担保するために、「日本的性格」という文化的同質性に基づく厄介な観念に依拠せざるを得なかったことを明らかにした。このように、如是閑は「社会」の共同性に立脚した秩序の可能性を探求しつづけた反面、「政治」をもっぱら権力関係に還元し、集団内部にあるコンフリクトを調整して公共的秩序を形成する「政治」の意義を積極的に捉えられなかったのである。

ところで、「社会」秩序と「政治」秩序を対置した如是閑の発想には、20 世紀初頭のイギリスで隆盛した政治的多元主義（political pluralism）の影響が強く見られる。政治的多元主義は、主権の実体化への批判を通して、国家に実体的に同化していた「政治的なるもの」が「社会」の諸集団に機能分化する事態を肯定的に捉える視点を切り開いたが、その理論を本格的に日本へ紹介した人物こそ、本研究で扱う中島重である。したがって、当該期日本において、上述した「社会」と「政治」との関係をめぐる問題を、中島が深く考えていたことは想像に難くない。にもかかわらず、従来、政治思想史の分野では、政治的多元主義の「祖述者」という程度の言及にとどまり、中島を直接対象とした研究は、わずかな例外を数えるばかりである。

「社会」と「政治」の問題、すなわち「社会」と「政治」の領分ないし「線引き」という両者の関係が、戦間期日本においてどのように論じられてきたのか。その一端を明らかにするには、中島重の思想的営為を検討することが、必要不可欠ではないか。そこで、申請者は中島の政治思想の考察を研究課題としたが、そのさい、以下の 2 つの観点を重視した。

（１）中島の「社会」と「政治」の理解に見られる一貫性と変遷を明らかにすること。政治思想の分野で研究が低調であることは先述したが、その数少ない先行研究も『多元的国家論』（1922 年）の考察に集中し、他方、社会運動史やキリスト教史の分野では、30 年代以降の「社会的基督教」との関わりを問う研究がもっぱらである。本研究は、中島の思想の鍵概念であった「共同社会」の観念を検討することで、1920 年代から 40 年代に至る通時的な考察を試みる。

（２）「社会」と「政治」との関係づけ、および「政治的なるもの」の観念をめぐる政治理論研究への架橋を目指すこと。とりわけ、社会内部の紛争や対立を権力的に解決することを通じて秩序を創造維持する作為的な営みとしての「政治」が、「社会」諸集団に拡散してゆく「政治の社会化」（川崎修『「政治的なるもの」の行方』2010 年）の一つの事例として、中島の政治思想を位置づける。

２．研究の目的

戦間期日本の代表的な知識人の一人であり、政治的多元主義の紹介者として著名な中島重の政治思想を取り上げた。具体的には、中島が力説した「共同社会」観念を明らかにした後、国家主権の実体化を批判して「社会」の規範的意味を重視した中島が、公共性や権力という「政治」の本来的な属性をどのように理解したのかを考察した。

３．研究の方法

【Ｈ２８年度：基礎作業期】

本研究を遂行する上での土台となる基礎的研究に費やした。具体的には、以下の 2 つの課題に取り組んだ。

（１）　中島重の政治的多元主義理解の検討

① 中島重『多元的国家論』に関する研究史の整理。蠟山政道『日本における近代政治学の発達』（1949 年）・田中真人「ギルド社会主義と中島重」（『キリスト教社会問題』30 号、1982 年）・西田毅「大正期の日本思想と

政治的多元論 political pluralism」（『同志社法学』347 号、2011 年）等、政治思想史の分野における研究について概括を行った。
② 同時代で政治的多元主義を受容した他の知識人の考察。高田保馬（『社会と国家』1922 年、等）・室伏高信（『著作集 第二巻』1926 年所収の「ギルド社会主義論」等）・杉森孝次郎（『国家の明日と新政治原則』1923 年、等）の多元主義理解について整理した。

（２）「社会的基督教」の政治思想としての意味の解明
①「社会的基督教」に関する研究史のフォロー。「社会的基督教」運動及びそれへの中島重の関わりについて、嶋田啓一郎「発展する全体と社会的基督教」（『キリスト教社会問題研究』14・15 号、1969 年）・武邦保「「社会的基督教」における中島重」（同上 20 号、1972 年）・倉橋克人「中島重と「学生キリスト教運動（SCM）（1）（2）」（同上 61・62 号、2013 年）等、主に日本キリスト教史の分野における先行研究の整理を行った。
②「東亜協同体」論への中島重のコミットメントについての解明。まず、中島の「東亜協同体」論に関する言及を取り上げた貴重な研究である倉田和四生『中島重と社会的基督教』（2015 年）、および今堀美樹「『社会的基督教』誌にみる「東亜協同体」論の検証」（『キリスト教社会問題研究』65 号、2016 年）を整理した。そのうえで、同時期に出版された後期中島の代表作『発展する全体』（1939 年）・『国家原論』（1941 年）の読解作業を進めた。

【Ｈ２９年度：検証期】
前年度の基礎的研究をふまえ、中島の「共同社会」の観念を検討した。中島は「人格と人格との最も根本的、内的結合を意味する所の社会」（『社会的基督教概論』1928 年、6 頁）と述べ、キリスト教的な人格主義により「共同社会」を基礎づけていた。同じくキリスト者の吉野作造が説く「相愛互助」による「社会」秩序との比較等を通して、中島が「共同社会」と公共性や権力の問題、すなわち「社会」と「政治」にどう折り合いをつけようとしたのかについて、通時的に明らかにした。

４．研究成果
従来の「社会の発見」論は、近代日本における「社会」観念の自律化過程について、国家による公共的価値の独占の克服という側面を強調し過ぎていないだろうか。政治的多元主義の受容に関しても、国家主権の絶対性を否定して国家秩序を相対化した点を重視するあまり、政治が社会の諸集団に機能的に分化してゆく「政治の社会化」という状況が、かえって政治の公共的・権力的契機（S.ウォーリンのいうところの「政治的なるもの」）を見失うことの思想的意味がもっと問われるべきではないか。以上の仮説に基づき、本研究では、政治的多元主義の本格的な紹介者であった中島重の政治思想を検討した。
中島は政治的多元主義を精力的に受容することで、国家を共同社会（community）の団体（association）の一つと位置づけ、その役割を限定的に捉えた。他方で、共同社会の構成原理を結合と連帯とし、それらが範囲と深度において拡大進化してゆくと考えた。中島はそうした傾向を「社会化」と呼んで重視した。彼にとって「政治」は、国家の統治行為ではなく、権力を行使して「社会化」を促進させる営みとして理解された。したがって、「政治の機能性と共同的性格」を説き、「強制社会化意力」の行使として政治を理解する中島の思考には、紛争や対立に折り合いをつけ、公共的、すなわち公開された承認に基づく集団的意思決定という政治における公共性の契機はきわめて希薄である。1930 年代半ば以降、中島の議論は全体主義の色調を帯びることになるが、それは「ゆらぎ」でも「変説」でもなく、彼の思想の核心であった社会化の論理的な帰結であった。「社会」領域の拡大は、「政治」にとって望ましい結果をもたらすとは限らない。むしろ、社会の諸領域に政治が構造化された「社会の政治化」 という恐るべき事態をも引き起こす。本研究で明らかにした中島重の蹉跌は、「社会」と「政治」の関係づけをめぐる難問をわれわれに突き付けているといえよう。
残された問題も存在する。社会学・国法学という学問上の確信とキリスト教信仰の関連、および初期の政治的多元主義の立場から後年の「全体主義」の擁護へと転換するにあたり、「社会的基督教」への傾斜が深い影響を及ぼしていることに関して、後述の「学会報告」等で有益な示唆を得た。本研究は、中島の思想の全体像の把握に重点を置いたため、これらの論点を十分深められていない。中島のキリスト教理解、「社会的基督教」運動での人的・思想的交流をふまえつつ、今後の研究課題として取り組みたい。

なお、本研究の具体的な成果については、以下の論文・学会報告等を通じて公表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）
① 織田健志「社会化の陥穽―中島重における「社会」と「政治」―」岩手哲学会編『フィロソフィア・イワテ』第 49 号、2018 年 1 月、13―26 頁。査読有。

② 織田健志「社会」米原謙編『「天皇」から「民主主義」まで　政治概念の歴史的展開第九巻』晃洋書房、2016 年、182－203 頁。査

読無。

〔学会発表〕（計　4 件）
① 織田健志「戦間期日本における「社会」と「政治」—中島重の政治思想を手がかりに—」、同志社大学人文科学研究所、第 19 期第 8 研究報告、2018 年 1 月 26 日、同志社大学。

② 織田健志「戦間期日本における「社会」と「政治」—中島重を手がかりに—」、日本イギリス理想主義学会・関東部会、2017 年 12 月 2 日、明治大学。

③ 織田健志「時期区分としての「近代」再考」、第 3 回「思想の対話」研究会（日本思想史学会主催）、2017 年 8 月 31 日、東京大学。

④ 織田健志「社会化の陥穽—中島重の政治思想—」、岩手哲学会、2017 年 7 月 15 日、岩手大学。

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
織田　健志　（ODA, Takeshi）
岩手大学・教育推進機構・准教授
研究者番号：00571796

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）